

今度は敵の大將晴信わかげと申、少人數といひ、旁もつて油斷強敵といふことを忘れ、味方よりはる番をも一人出さず、略下

〔駿臺雜話四〕大敵外になし、いよ、御聞あり度候は、某が宅へ御越候へといはれしかば、日ぞ定て、禮服を著し、彼宅へ往れしに、掃部頭直孝井伊出て對面の後、世話に、油斷大敵といふ事定て御

覺へあるべし、某が傳授外にはなく候、此一言にて候ぞ、必御忘れあるな、略下

〔甲陽軍鑑九上〕品第二十三、信州平澤大門到下合戰之事  
又かたはらにては、鬼神の様なる父信虎を押出し、其後信將衆に度々勝しかも、若氣のやうにもなく、勝ては甲の緒をしむるやうにせらる、は、如何様たゞ人の體には見えす候、略下

〔駿臺雜話三〕手折手にふく春風、もし時のもやうにつきて、覺悟を變じ、世話にいふ、えりもとにつくやうにては、なにを以て、士と申し侍るべき、

〔義貞記〕一奉公用意事

隱。テ。ノ。信。ハ。顯。テ。ノ。德。ト云事アレバ、愚人ノ前ナリ共、心中終ニ隔アラジ、

〔瑳囊抄一〕世謠以恩報怨云、證據アリヤ、常个云ザレ共、論語、或曰、以德報怨何如、子曰、何以報德、以直報怨、以德報德云リ、然共佛法、又報怨以德爲善、以恩報怨、怨永亡、自他安穩故、略下

〔嘉吉物語〕入道殿涙を抑へ、かさねてのたまふやう、何事もうやまは、略したかへと申す譬あり、  
〔駿臺雜話二〕秘事は睫、さて諸客いひけるは、略中、此程世の諺に申傳しは、かなき事につきて、御

物がたりを承候て、いづれもふかき意味ある事を覺え侍る、誠に秘事は、睫にて、あまりちかきは、  
反て見へぬものにて候故、我等どもの意得ぬにて侍るべし、

〔明德記中〕暫ク引エテ都ノ方ヲ顧タレバ、我逃ツル跡ニハ一人一人モ見エズ、猶内野ニハ軍ノ有ト覺エテ、時ノ聲幽カニ聞ケレバ、是ハソモ何事ニ是迄逃タリケルゾヤ、我ナガラモカ程臆病マデ、